

氏名	李 焱 (リー エン)		
学位の種類	博士 (芸術)		
学位記番号	甲第 1 号		
学位授与日	平成 16 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
論文題目	偶発と理性がわれわれの美に与えたもの ～絵画技法研究を通じた絵画分析～		
審査委員	主査 教授	馬 越 陽 子	
	副査 教授	辻 惟 雄	
	副査 教授	近 藤 秀 實	
	副査 神奈川県立近代美術館館長	板 倉 聖 哲	

内 容 の 要 旨

実際に絵画を制作する私は、良い絵とは何かを常に問いかけている。素晴らしい絵、魅力のある絵、味がある、震える、感化させられる、心を打つなどの、良い絵。この良い絵という定義は一体何なのだろうという、絵を描く者の一疑問からこの論文は書き始められる。良い絵を前にすると、歴史的、社会的条件がその背後にあることを知らずとも、圧倒的な存在感に私の眼と心は奪われる。

良い絵とは何かを定義することは困難なことだ。普遍的な定義を見出す作業が、余りにも漠然とした結果を生むかもしれないし、逆に個人的な解釈の範疇に陥る危険性もある。その危険を避けるためにこの論文で私は、「偶発性」と「統御性」という視点からの検証を行った。

「偶発性」とは、画家の意図しない現象が絵画の画面上に生じることである。「統御性」とは、画家が意図したことをその画面から読み取れることである。実際に私が絵画制作をする経験から語ると、例えば絵具をキャンバスに投げ付けて、絵具の広がるまま、流れるままにする場合が「偶発性」である。逆に、構図を決めたり、描くべきところを実直に描いたり、余分なところを拭き取ったりすることが「統御性」である。

われわれが絵を眺める際、この絵は何を意図しているのか、この部分の意味するものは何かなどと考える。それと同時に、感覚的に受け取る、言葉にならない印象がある。この論文の前半は、言葉にならない印象に深く関わっているものが「偶発性」であることを確認し、それが良い絵の重要な要素になっていることを、水墨画から探ってゆく。水墨画は、偶発を画面上から読み取ることにとっても適している。

偶発性はしかし、単体では存在できない。画面に広がる滲みや染みだけでは、良い絵

にはならない。良い絵には統御性と偶発性の両者が必須であることを、張彦遠の『歴代名画記』から読み取って私の絵画論を展開した。そして朱景玄の『唐朝名畫録』を中心に、逸品画風]、神、妙、能の三品を、絵画制作の立場から定義し、「気韻生動」が「絵画空間の表現」だという推論を行った。

次に「偶発性と統御性」、「気韻生動＝絵画空間」の二つをベースにし、梁楷の「李白吟行図」、牧谿の「観音猿鶴図」を眺めた。ここから梁楷は線的表現、牧谿は色彩感覚の表現によって絵画空間を追い求めた画家であると、私が油彩画を学んだ経験に照らして推論を試みた。

「気韻生動」は、時代によってさまざまに解釈できると思う。「気韻」は、壮大なエネルギーの場、宇宙的広がりへの表示にはじまり——人間の精神や生命感——から、絵の気品、精神性の語彙へと変わっていった。現在、絵画でその語が用いられた場合(賛辞で用いられる言葉であることは共通だが)、個人の感覚的な印象で理解されているように思われる。私は、自分の制作を通して、この気韻生動を絵画空間の表現と捉えた。そうすることで、古今を問わず、また西洋画に対しても気韻生動という言葉が適用することが可能になると考えた。

論文後半は、西洋画、カラヴァッジョを中心に、これも「偶発性と統御性」、「気韻生動＝絵画空間」から論じた。さらにグリーンバーグの『抽象表現主義以後』を引用し、モダニズム絵画においても、偶発性と統御性、気韻生動が良い絵に重要な役割を果たしていることを展開した。

この論文は、良い絵とは何かを、「偶発性と統御性」、「気韻生動＝絵画空間」から見出しそうと試みたものである。東洋西洋を問わず、また水墨画油彩画を問わず、「絵画」が人類共通の財産であり、さらに美というものがわれわれに与える影響は非常に大きいもの——美が単なる人間の表現結果であるというのではなく、美そのものが人の意識を決定するもの——であることを、私は強く信じている。

良い絵とは何かを、科学的に分析することは不可能である。しかしすべてが曖昧だということでもない。偶発性と統御性、つまりは自然と人間、この両者は分かちがたく結びつき、それに優劣はない。「絵画」を自然と人間という観点で捉えること、素晴らしい絵、良い絵とは、私たちに自然との関係を思い出させ、癒すと同時に警告を与えるものでもある。

そして絵画空間は、視覚的なトリックの空間ではない。見る者一人一人の心の中に広がる空間なのである。偶発性と統御性、気韻生動は、私の油彩画の制作でも重要なテーマになっている。絵画を制作する者の画論であるこの論文が、時代を越え国を越えて良い絵は存在することへの、証明のひとつになればよいと思っている。